

芸人の世界での上下関係は厳しいものがありました。ある先輩との関係は日常会話から大変でした。その先輩、会話の途中で想像以上の手数でボケ倒します。芸人にとって「ボケた人を無視し、ツッコミを入れない」ということは、失礼に値します。また、ツッコミの練習の機会を頂いているという要素もあるので、その先輩との会話は、常に聞き逃さないように集中する心構えが必要でした。常にボケへの対応の緊張感を持つ

① ボケとツッコミ



話を聞き逃さない集中力

たなければならず、安らぐことのできない先輩でした。しかし、アドバイスを頂く時や夢を語る時は、ボケずに真剣に語るべきな先輩でもありました。その先輩との会話は、その内容だけでなく、お話しただいた時のシチュエーションを全て思い出せるくらい印象深いものでした。

その後、小学校教員になり、子どもたちに「聞く耳」を持たせることが、私が教師として大切にしている視点でした。そこでこの先輩との経験を、教育現場にも取り入れました。それは「ツッコミのあるクラス」をつくることです。教師が常にボケ、子どもがツッコミを入れる図式をつくるのです。



お笑いの世界では、ボケに対してツッコミがあつて初めて笑いが成立します。つまり、教師がボケただけでは、笑いは起こらず、子どもがツッコミを入れることで笑いが起こります。例えば「君たち」に「つ言いたいことが二つある」と言いながら、三つ伝える程度のボケでよいのです。子どもたちが



らは「一つちゃんやん!」「三つ言ってるやん!」などのツッコミがあり、笑いとなります。ツッコミを入れる子どもたちは、会話の文脈を的確に判断する力が必要であるので、私の話をしっかりと聞き始めました。また、ツッコミを入れない周りの子どもも笑いたいので一連の流れを聞き逃さないように集中して聞きます。もちろん大切な話の時はボケずに真剣に伝えます。

すごい集中力で授業を聞くようになりました。私の取り組みはボケ・ツッコミという芸人自体のスキルを生かしたものでしたが、子どもたちと信頼関係を築き「この先生の話を聞きたい」、常に心に響く話をして「話を聞き逃すともつたない」と思わせる仕掛けができれば同様の効果はあります。人に何かを伝える時は「話すスキル」も必要ですが、それ以前に「聞かせる(環境をつくる)スキル」も必要です。

